

陽気な船長とひねくれボッチ

斎藤宏介

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「私たち、、、高校卒業したら一緒に暮らさない?」

俺ガイル×ラブライブサンシャイン!のクロスs sです。

多少のキャラ崩壊有ります。主に俺ガイル側で物語は動きますが、どちらのキャラも、出すつもりです。

処女作品ですが、暖かい目で見守りください。よろしくです。

目次

始まり

魔王との出会い

1

魔王と曜と八幡と。

5

始まり

魔王との出会い

「私たち、、、高校卒業したら一緒に暮らさない?」

桜が散り、春風が俺の体が包んで要る。ああ、なんとい「はちえもー」

八幡「なんだよ、曜」

俺の幼なじみもとい彼女である渡辺曜が俺の元へ駆け寄ってくる。

曜「私たち、やっと高校生になったね!」

八幡「そうだな。」

~~~~~

春から俺たち二人は晴れて高校一年生になった。俺は理系が、曜は文系が苦手だったので、お互いの利害が一致し、一緒に勉強して、やつとこさつとここの”千葉県立 総武高校”に入学したのだった。(曜は前期、俺は後期で受かった。)

~~~~~!~~~~~!~~~~~!~~~~~!

一年A

長い校長の話わり、クラス分けを見てみると、

男 12 比

企ヶ谷八幡

女 07 渡辺曜

やっぱり同じクラスだ。これで10年連続同じクラスだよ、。

”渡辺曜”彼女とは家族ぐるみの付き合いだ。何でも家の親父
同士が同じ大学なんだと。

俺と曜が出会ったのは三歳の頃、海に行ったときに、俺が溺れた
のを曜の父親に助けても らってから、よく遊んでいて、知らない
うちに仲良くなった。あのとときの俺とただアクティブなんだ
よ、。今では友達の作り方が分かりません。。。。、まる。

曜「はちくーん。またおんなじクラスだねー!、今年も宜しく!」
八幡「おう、ところでお前にか入る部活なんか決めたのか?」
曜「うーん、それがどうしようか迷ってるんだよね、はちくんは
何部入るの?」

八幡「俺が部活なんて、入ると思うか?笑、、、、、、、、と
言いたい所なんだが、さつき自称若手の平塚雷鳥先生から、奉仕部強
制入部させられたわ、。。」

曜「えっ、なんでなんでw」

?? 「あら？お客さんかな？ひゃっはろ〜!!、私は雪ノ下陽乃、よろしくね！」ニコニコニコニコギラ

陽乃 「入部かな??」ニコニコギラギラ

八曜 「チガイマス」

八曜 (これヤバイやつだわ笑)

魔王と曜と八幡と。

?

?

?

曜「どうすんのさ、これ」

八幡「いや俺に聞かれても…」

俺たちは今、奉仕部の扉の前に佇んでいた。

平塚先生に命令されてここ、奉仕部まで来ていたわけだが、何ですかあの仮面を三重くらいつけてそうな悪魔は……俺と曜との楽しいスクールライフ（笑）が邪魔されてたまるか。

陽乃「その二人、入っておいで。悪いようにはしないから♡」
曜「どうするのさ八幡。このままだったら殺されちゃうかもしれないよ……」

八幡「流石にそれはないだろ……いや、あるかもしれん」

八幡「とりあえず入るか……」ガラリ

アルミでできている軽くてある意味重い扉を俺たち二人はあけたのだった。

?

?

?

陽乃「とりあえず、二人はここにすわってね〜」

そうやってこの仮面少女（仮）は俺たち二人に淹れたてであろう紅茶と、市販か手作りかわからないレベルのクッキーをほんの数秒でだしてきた。どんだけだよ、この女……

陽乃「さつきもちよっぴり自己紹介しちやっただけど、私雪ノ下陽乃。よろしくね!」

そういつて雪ノ下陽乃は握手を求めてきた。

八曜「ヨ、ヨロシクオネガイシマス。」

陽乃「そんなに固くならなくていいのにく、一応わたしこの部活の部長をしてるんだ〜。っていつてもこの部活部員三人しかいないけどね!!」

少なっ!! まあそうだろうな……これじゃあ、というか後の二人は何者なんだろうか……

陽乃「あとの二人はねえ、ええと、一人は生徒会の子。あと一人はさつき入部届けをだしてきたんだ〜。ええと、確か一色さん。だったかな。」

この仮面少女俺の心読んできたぞ……。もうこの人魔王じゃねえな。大魔王だな。昇格おめでとうございます。そうだ、もう心の中ではるのんって呼ぼう。

俺がしようもないことを考えることを止め、隣に立っている曜を見ていると難しい顔をして、うう〜ん。とうねっていた。なにこの可愛い生き物。お持ち帰りしたい。

曜「あつ、ええ〜と……雪ノ下先輩。「陽乃って呼んでね!!」え〜

と、陽乃さん。私たち一応入部したくてここに来たんですけど、入部届けは受理されたってことでいいんですか？」

陽乃「うんっ、いいよ〜！これからよろしくね!!二人とも!!!」

八幡「俺の意見は・・・」

陽曜「えっ、拒否権なんて常任理事国しかないけど。」

俺は部員なのに常任理事国じゃないんですかそうですか。。。まる。

陽乃「というわけで、二人とも明日からよろしく!」

曜「はいっ!!!よろしくお願いしますっ!!!陽乃先輩!!」

八幡「よろしくおねがいしゃす。」

陽乃「うんっ!よろしく!あしたからこの部室に放課後は来てね」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

?

?

?

~~~~~比企ヶ谷家にて

八幡「たでくま。」

曜「ただいまくく」

曜さん、なにナチュラルに俺の家入っちゃってるのかなー……。まあ、いいんだけどさ。いつつもこうだし。

小町「おかえりく曜さん!!と、おにーちゃん。」

八幡「俺はついでかよ……………」

比企ヶ谷家と渡辺家は隣同士である。俺も曜も小さい頃からずっと行き来しているので、お互いの家に入るときは、ただいま。と言うようにしている。

最近では俺の両親は、バリバリ働いているので家には基本小町と俺しかいないことが多い。それは曜の家も同じようで、よく曜はうちに来ている。

小町は曜が大好きだし、曜も小町を気に入っているの、うちは全く迷惑ではないが、曜はなぜか寝るときになると、俺の布団に潜り込んでくる。おい、一応高校生同士だぞ……………。曜も曜の両親もそれでもいいのか、

今日は今日とて、日々はまた過ぎていく……………